風　光　と　都　市
―ポール・ヴァレリーと場所の経験―

安　永　　愛

はじめに

ある数学者の言によれば、風光明媚な場所に時代を画すような数学者は生まれるという。人がどのような風景を目にしながら育っていくかということは、抽象的な学問にとって、いや抽象的な学問にこそ決定的だというのである[1]。この見解は、二十世紀前半のヨーロッパを代表する知性とも称される詩人・批評家ポール・ヴァレリー（1871 ― 1945）の事績を考えるにあたっても、まことに興味深い。誤解を恐れずに言うならば、ヴァレリーは、数学に強い親近性を持つ一人である。普遍性への志向、最小限の手段によって最大限の自由を実現させるようなエレガンスへの好尚は彼の思索と著述の基調であるが、そこには数学の本質に一脈通じるものがあるのである[2]。

筆者は、19 世紀のフランスに澎湃として沸き起こった実証主義批評の如き決定論[3]を唱えたいのではないが、作家の自己形成には、書物の経験のみならず、あるいは、それと同等、それを凌駕するほどに、風光や町の佇まいが大きく与っているという印象は否定し得ない。作家にまつわる何らかの場所を訪れることで机上の読書では得られなかった深い了解に達するという経験は、決して稀なことではない。本論文では、ヴァレリーが人生の中で関わりを持ったいくつかの場所に焦点をあて、ヴァレリーにとっての場所の経験というべきもの、そし

---

[1] 田口雄一郎「草囁地呟」『桃源』vol. 29, 2007年冬季号、5―7頁

[2] ヴァレリーの日々の精神の営みの記録である『カイエ』には、頻繁に数式や幾何学の図が登場する。数学者ポワンカレの『科学と仮説』はヴァレリーの愛読書の筆頭であった。とはいえ、学校教育レベルでの数学において、彼はむしろ劣等生であり、数学、ことに幾何学の学力不足のために、海軍兵学校への進学断念を余儀なくされている。

[3] サント・ブーヴ、テーヌらが担った批評の形式。作家の作風は、人種的、環境的なものの相関物として現れるとする。サント・ブーヴは作家の「個性」「人となり」の見極めに照準したが、テーヌは更に実証主義を推し進めて、環境と作品とを系統的に分類する手法をとった。

て、その場所の経験によって育まれた彼の感性、さらに具体名を持つ場所の経験の言語化の特質を明らかにしてみたい。

もとよりヴァレリーの仕事の総体からすれば、普遍妥当性を持つ抽象的で一般的な命題へのアプローチが優勢である。決して彼は、エキゾチズムの作家でなければ、ましてや旅行作家でもなかった。ヴァレリーは、「個性」や「地方色」の賞揚を重要な要素として持つ前世代からのロマン主義の潮流には背を向けた、いわば古典主義者としての顔を持っていたのであり、その意味では例えば、土地の名や人名ーすなわち「固有名」ーの追求を小説の不可欠の推進力としていた同年生まれのプルーストとは対照的であった。固有名よりも、抽象的で普遍妥当性をもつカテゴリーに優位を与えること。それが彼の「方法」でもあった。とはいえヴァレリーは、決して外界と切り離された瞑想や思索に終始していたわけではない。高められた内的ポテンシャルが機会を捉えたとき、あたかも敏感な測定器のごとく、ヴァレリーは場所に反応しているのである。

ヴァレリーを対象とする個別作家研究の蓄積は厚く、ヴァレリーと個々の場所、各段階の年齢に焦点をしぼったモノグラフも数多い。詳細な伝記的事実とのからみあいも含めてまさに汗牛充棟である。本論文ではむしろ、繁茂する伝記的事実の追求は最小限に留め、個々の場所の経験から浮かび上がびくるヴァレリーの生涯を貫く思考と感性[4]を、できるだけ俯瞰的に捉えてみたい。そして、ヴァレリーの数々の場所の経験と、彼が「ヨーロッパの知性」と称されるに至った条件との関係性について、ささやかながら光を投げかけられればと思う。

1．原風景としてのセート

ヴァレリーが生を享けたのは、地中海に臨む小さな港町セートである。夏のヴァカンスを母親の故郷ジェノヴァで過ごしたことを除いて、13 歳までヴァレリーはこの地で暮らした。この町の風光は、ヴァレリーの原風景である。

自らの生地について語った講演においてヴァレリーは「私は、生まれるならばそういう場所で生まれたいと思うような場所で生まれた、という単純な感想を述べておく[5]」との言葉を残している。この言葉には、どこに生まれるのかは

[4] 本論文においては、ヴァレリーの知性と感性を俯瞰する、などという大それたことを企図しているわけではない。あくまで、ある特定の場所の経験がどのように知性や感性の形成に与っているのかを考えてみたいのである。

[5] Paul Valéry,《Inspirations méditerranéennes》, *Oeuvres I*, édition établie et annotée par Jean Hytier, Gallimard, 1957, p.1084

偶然によるとする根本的な感じ方と、偶然めぐり合った場所が好ましいものであったとの幸運の意識とが感じられる。自らの人生の偶然性への気づきと幸運の意識。これが生地への思いの根本にある[6]。そしてまた、どの地にあっても偶然そこに居るように感じること、長く住みついているとしても、どこか他所からやってきたような感覚を常に保っているのがヴァレリーの特徴である。

セートの町や風光を語る際ヴァレリーは、人間の最も根本的な条件が単純に露呈する場面に焦点を合わせている。すなわち、人間の活動と、海という人力ではどうにもならない非人間的な存在とが対置されるような場面である。

> 私は、海や人間の活動から、私の生涯の最初の印象を受けるような場所で生まれたことを嬉しく思っている。すなわち港を見下ろしている露台からの眺めほど、私の愛する景色はないのである。（中略）眼はこの恵まれた展望台から沖に陶酔し、海の単純さを把握し、それと同時にまた、人間の生活や、人間が公易し、建築し、操作するのも、そこからは間近に見えている。眼は随時に自然を眺めることができて、それは本来の永遠に原始的な自然であり、人間はそれに対して作用することを得ず、それはまた明らかに宇宙的な諸勢力に絶えず曝されているのである。そしてそういう自然の眺めは、地上の最初の人間が見たものと全く同じなのであるが、眼差しが陸地に転ぜられる時、そこにはまず、海岸を再現なく形作ってゆく、不規則な、時間の仕事と、次に人間の相互間の作業が発見される。そしてそれらの累積した建築物に用いられている幾何学的な諸形式、直線や、平面や、曲線は、自然の諸形式の混沌や曲折と対照を成し、人間の意志的な、いわば反逆的な所産である望楼や尖塔や灯台は、転落や崩壊の相貌を呈している地質学的な自然に、自然の傾向の逆をゆく建設的な意志を以て対抗しているのである。
>
> かくして眼は同時に人間的なるものと非人間的なるものとを見渡すことができる[7]。

---

[6] ヴァレリーの父はコルシカ島の生まれの税官吏、母はジェノヴァ生まれのイタリア総領事の娘である。セートは父親の任地に過ぎない。「父からコルシカ人の血を引き、母からはイタリア人の血をひいた私には、フランス人の血は一滴も流れていない」とヴァレリーは述べている。ミシェル・ジャルティは、浩瀚なヴァレリーの評伝（49行1361頁）の冒頭に「ヴァレリーの物語は、ラングドック沿岸への新参者たるある家族の偶然―あるいは運命―によって、イタリア語へのフランス語の「接木」を経て作家となり得たひとりの子供の物語に他ならない」と述べている。（Michel Jarrety, *Paul Valéry*, Fayard, 2008, p.13.）

[7] Paul Valéry, *Oeuvres I*, pp.1084-1085

ヴァレリーは己の中に原始人を宿しているとも言えようか[8]。だからこそ、つつましい小さな港町の人間の活動およびその所産と、自然との対比が際立って見えてくるのである。人間的なものと非人間的なものをいちどきに眼にするという体験。この体験についてヴァレリーは繰り返し「眼」を主語として語っているが、ここには、欲望や先入観に左右される人間という行為主体よりも、眼という器官が無私であり公平な審判者であるとのヴァレリーの感覚が働いているのだろう。

ヴァレリー自身は語ってはいないが、やや穿った見方をするならば、生地セートにおいて「人間的なものと非人間的なもの」の対照という、あまりに単純で根本的であるがために却って知覚から抜け落ちかねない局面にヴァレリーが眼を開いたのは、セートの町およびヴァレリーの生家[9]の、贅沢や虚飾とは無縁の素朴さであり、つつましさであるように思われる。ここで社会学者のピエール・ブルデューの言葉を借りるなら「文化資本」を競うことから遠く、人間的な要素は質実剛健なる生活の維持というレベルに切りつめられており、それ故、海と空と陽光が絶対的な存在感で領しているような世界である。セートで過ごした少年期についてヴァレリーは、次のように語っている。

> 実際、私が勉強をうっちゃって過ごした時間ほど、私を教育し―あるいは構成し、一私にしみ通り、私の形成に役立ったものはない。そうして過ごした時間は一見空虚なものであったが、それは実際は三つか四つの紛れも無い神格を有するもの、すなわち海とか、空とか、太陽とかの崇拝に過ごされた

---

[8] ヴァレリーは、人間の原始の状態というのにある種の共感の入り混じる関心を抱いていたと思われる。ヴァレリーはセートの浜で出会った流浪部族について、「ラングドックの海辺」と題されたエッセーの中で、次のように書いている。「空腹に襲われたときも、奇蹟が起こって、私たちに食べ物を与えてくれた。この海の砂漠では、ぼろテントの陰で野宿をする漁師たちの流浪部族に出会ったものだ。かれらは数ある人生のうちでももっとも簡素な、おそらくもっとも自由な人生を送っていた。原始家族がそこにはあり、見るひとの眼にその存在の必然性をあきらかに示していた。砂の上に網を引き上げなければならないときは、男も女も子供も、任務の労を担い、それぞれに異なる筋力を組み合わせ、共同の努力をして、心得たリズムに合わせて息を一つにそろえ、骨を折ったのだ。」(《La rive du Languedoc》in *Vues*, La Table Ronde, 1948, pp.262-263)

[9] ヴァレリー一家はいわば核家族としてセート市街の運河沿いの小さな三階建てに間借りしていた。上述のジャルティの評伝には「ヴァレリー家の外観には眼を引くところはなく、運河界隈に同時期に建設された建物と同じく何の魅力もない。モンペリエやベジエ（筆者注：セート近郊の南仏の小都市）と異なり、セートでは立派な館は建てられなかった」(Michel Jarrety, *Paul Valéry*,, p.18）とある。ヴァレリーの生家は、中産階級下層というレベルであり、働かずとも食えていけたプルーストやジッドのような境遇とはかけ離れていた。受け継ぐ資産を持たなかったヴァレリーは、文壇に認められるようになってからも、常に「貧しさ」の怯えから逃れることはなかった。

のである。私は、それとは知らなかったが、原始人のいいようのない驚きや感激を経験した。そういう、私が少年の頃味わった豊富な恍惚感、そういう静観と黙考との状態は、私にはいかなる本よりも尊く、いかなる作家も我々に与えることのできないものに思われるのである。というのはその内容として、限定されている、あるいは限定することのできる思想を何も持たぬ、ある種類の観照、さらに詳しく言えば、一日の昼間を構成している純粋な諸要素への、すなわち我々の存在する圏内のもっとも大なる、最も単純な、最も熾烈に単純であって、最も熾烈に感覚できる物象への、ある種類の注視、また、それに促されて、我々が絶えず、あらゆる事件や、存在や、表現を―それ等と、眼で見える最も広大なもっとも安定したものとの関係の上で、―認識する習慣は、いかなる本よりも、いかなる詩人や哲学者よりも、強力に我々に作用し、それは我々の本然の性質の真の偉大さを、我々が努力したり考えたりすることなしに感覚するように、また我々にとって最高級のものであると同時に、最も「人間的な」状態への階梯を、我々自身のうちに容易に見出すように、我々を形成し、導き、習慣ずけるのである[10]。

少年ヴァレリーは、セートで何も「文化資本」なるものは蓄積していなかった。しかし、老年を迎えたヴァレリーは、幼き日のセートで、空と太陽と海という圧倒的な実在を前にひざまずき、それらから汲み尽くしようのない感覚や感情を与えられたことの恵みをしみじみと振り返っているのである。空と太陽と海が呼び覚ましたのは、人間的な状態への階梯を登っていくことへの誘いであったとヴァレリーは感じている。空や太陽や海のように「熾烈に単純である」ことのかけがえのなさを前に謙虚であることと言ってよいのだろうか。そうしたものが恐らくヴァレリーの思考の根本にある。ヴァレリーは別の講演で「自分の思考が、自分の奥底に、純然たるセート起源の印象を幾分なりと見出さないときは、いくらか深まりそこなうということを観察しました[11]。」と述べているが、それは、ヴァレリーが「文化資本」に奢ることのない「熾烈な単純さ」への志向を持ち続ける必要を痛感していたからではなかろうか。

ところで、一口に地中海の港町とセートを説明したが、その地理条件は実に

---

[10] Paul Valéry, *OeuvresI*, p.1092

[11] Paul Valéry,《Discours pronouncé à l'occasion de la distribution des prix du Collège de Sète》, *Oeuvres I*, p.1438

独特なものである。セートは地中海とタウ（Thau）と呼ばれる鹹湖の間に位置する一種の陸繋島である。ほぼ東西に伸びる細い砂州が内陸に繋ぎ止められていなければ、楕円状の独立の島を形成していたはずである。セートの市街地はこの陸繋島東方のごく狭い（東西に１キロ、南北に２キロ弱）埋め立て地に限られ、そこには東西二本、南北一本の運河がめぐらされている。市街地の西南には、海抜 176 メートルのモン・サン・クレールの山並みが迫っている。例えば市街地のとぎれる北限あたりに位置する鉄道のセート駅に降り立ちヴァレリーの眠るモン・サンクレールの中腹にある海辺の墓地を目指し市街地を歩いていくとすると、広い道路の通る平地の部分はあっという間に過ぎ去り、まもなく坂の多い、小さな路地とつつましやかな建物で構成された界隈に差し掛かることになる。地中海を一望のもとに見下ろす墓地からの眺めはまさしく絶景である。2007 年 8 月下旬、灼熱の一日をセートに過ごした筆者の記憶の中では、セートの海も空も町並みも、偶然行き合わせたジュートと呼ばれる運河での水上槍試合の華やかな原色のイメージとあいまって、それぞれが眩暈を誘うほど強烈な光を帯び、吸引力を備えている。

ヴァレリーは、本来の用法からすれば破格であるが、として留保をつけながらも、セートの海の光景について「明晰な」clair という形容詞を用いている。筆者はセートへの旅を終え、この言葉を眼にした時、どれだけの実感がこめられているかわかるように思った。セートのミニチュアめいた町の佇まいと海の広がりの対比、そして、光と影の対比には、どこか恐怖感めいたものさえあったのであるが、その不可思議な感覚の一端をヴァレリーの言葉は解き明かしてくれているように思われたのである。ヴァレリーの言葉を引こう。

> 空と砂と水という三つの純粋な要素のみからできているかのような景観ほど単純な、鮮明な、そして明晰な（この用語を場所などに適用することがゆるされるならばだが）ものはない。そこの空気の透明さは嘆賞すべきものである。またそこにゆきわたる光は厳玲の限りである。視線はそこでは、眼をもって空間の全海域を所有するという広大強力な印象を変質させたり縮小させたりするような細部など見出すことがない[12]。

ヴァレリーをめぐっては、「人類に脳髄に宿った最も明晰な視力[13]」との評言

[12]《La rive de Languedoc》in *Vues*, La Table Ronde, 1948, pp.261-262.
[13] 大岡信「見ることと魅惑すること」『ヴァレリー全集１』月報、筑摩書房、1977年

があるが、そのような視力は、地中海に臨む陸繋島という地図上で見ても特異な印象を与える地理的条件のもとに育まれたのではないか、と考えるとき、自然と文化の相互交渉の秘儀に触れる思いがする。

2．秘密の園―モンペリエ

ヴァレリーは13歳の夏からモンペリエ大学を卒業するまでの期間をセートから数キロの位置にある中都市モンペリエで過ごす。セートからモンペリエへの転居は、父親の転勤に伴うものであった。セートもモンペリエもラングドックの行政地区内にあり、地中海の町として一つながりと見てよいように思われるが、ヴァレリーの著作や伝記的事実を辿ってみると、この地の与えた印象は、原風景としてのセートとは、かなり性質を異にするものであったことがわかる。

モンペリエへの転居は、「私のクラスには4人しかいなかったので、少しの努力をしないでも、私は確率がしからしむる所によって、四度に一度は一番になった[14]」とユーモア交じりに述懐されている牧歌的なセートでの学校生活とは違った緊張をもたらすものであった。クラスの人数は34人。父親からは「新しい級友たちについていけるようにまじめに勉強すること、無駄口は道端に限ること」などと厳命されている[15]。ただでさえ、大好きだった船を眼にすることもない生活、そしてだだっ広く、セートほどの光には満ちていない町に、馴染んでいかなければならないのだ。ヴァレリーは、ヴァレリー・ラルボーに生い立ちについての覚書を求められて、モンペリエの中学校への転校の頃を回想し、「いきなりクラスの劣等生に落ち込んだというわけ。欝状態です。」と書いている[16]。ヴァレリーがモンペリエの豊かさと魅力に気づくのはだいぶ後になってからのことである[17]。転校生としてまずは学校生活に溶け込み、切り抜けていくことにエネルギーを奪われていたヴァレリーの目には、モンペリエの風土が本当に映りこんではこなかったのである。

教師からは「頭はいいが無気力。努力も進歩も全然足りない[18]。」などと酷評され、ヴァレリーは学科をまじめに卒なくこなすことに困難を抱えることにな

---

[14] Paul Valéry, *Oeuvres I,* p.1085

[15] Lettre inédite du 18 octobre 1884, archives de la famille Valéry, citée in *Paul Valéry,* (Michel Jaretty), p.31

[16] Valéry Larbaud, *Domaine français,* Gallimard, 1941, p.260sq.

[17] Michel Jarrety, *Paul Valéry,* p.31

[18] Archives de la famille Valéry, cités in *Paul Valéry,* p.32

る。教師への不信の念も強かった[19]。その意味で学校生活は暗黒であったが、ヴァレリーはこの中学校で、生涯の友となるギュスターヴ・フルマン[20]に出会っている。また、翌年の２月にモンペリエ市内で転居し、自分の部屋を与えられたヴァレリーは、セート時代に書き始められた詩のノートを開く心の余裕も出てくるのとほぼ時を同じくして、モンペリエの町の魅力に目覚めていく。モンペリエが光と影の変化に富み、娯楽の欲求にも知的欲求にも応えるものがあり、活気と平穏とが矛盾なく両立していることが気に入ったのである[21]。後にヴァレリーは「モンペリエはフランス国内のほかの大都市のような愚かな感じがない。」とのスタンダールの言葉を自分のものとして刻んでみたいものだとまで書いている[22]。

この地でヴァレリーは、後の彼の知的・芸術的基盤を形作る数々の出会いを果たしている。この中都市にあってヴァレリーは図書館、美術館に自らの居場所を見つける。ヴィクトル・ユゴーを熱心に読み『ノートル・ダム・ド・パリ』の建築の長い記述を諳んじてさえいた[23]ヴァレリーは、通学していた中学の隣にあったファーブル図書館でオーウェン・ジョーンズの『建築提要』やヴィオレ・ル・デュックの『建築学辞典』を熱心に読み、建築という芸術への情熱を培うことになる。またファーブル美術館（現モンペリエ市立美術館）ではスルバランの「聖女アガート」やクリストフォロ・アォリの「ページの冒頭」に心を奪われている。ヴァレリーはこの美術館の作品の何枚かの絵に捧げる散文詩を一編草してもいる。セートにあって、海、太陽、光という単純で永遠なものの絶対性、そして素朴でしがなくもある人間の生活と、それに対置してある人間の力ではどうにもならない非人間的なものとの対照を深く心に刻まれたヴァレリーは、モンペリエにおいて、「芸術」という、単純な必要の次元を超えた活動へと心を開いたのだと言えよう。

ヴァレリーは、自分を一つの島のように閉ざされたものと受け止める感覚を常に持ち続けることになるが、この「島」のような自己意識の芽生えも、このモンペリエの地においてである。学校的なものへの不信と文学や芸術への目覚

19「こんな田舎じみた学士が、私の理解し得ないことを理解しているという事態が受け入れられなかった。」とヴァレリーは後に語っている。Paul Valér, *Cahiers, XXI*, CNRS p.706

20 ヴァレリーとフルマンとの間に交わされた書簡の一部は*Lettres à quelques-uns*に収められている。またフランス国立図書館草稿部にヴァレリー・フルマンについての資料がまとめられている。

21 Michel Jaretty, *Paul Valéry*, p.35

22 Paul Valéry,《Lettre du directeur de *La Vie montpelliéraine*》in *Réponses*, Au pigeonnier, 1928, p.22

23 Henri Mondor, *Précocité de Valéry*, Gallimard, 1957, p.49

めは、この「島」のような意識を強化していった。そのようなヴァレリーが思索や詩作のために訪れたのは、鈴懸の木や楡の木が並び、モンペリエ市街を一望の下に見下ろし、晴れた日には地中海を遠くに見ることのできるペイルーのテラスである。そして、もう一つのヴァレリーのお気に入りの散歩コースが植物園である。「思索する人、心配事を抱えた人、自問自答にふける人、そうした人たちが夕暮れになるとやって来るあの古風な庭[24]」と後に描かれることになるが、この植物園は、『テスト氏』連作中の「エミリー夫人の手紙」における、テスト氏とエミリー夫人の散歩道のモデルでもある。

モンペリエの町は古くから異教徒にも開かれた町であり、モンペリエ大学が古い歴史を誇っているのも、開学した 13 世紀当時、医学においては先端を行っていたイスラムの医学者を迎え入れたことによる。このモンペリエ大学の存在が、この都市に知的な基盤を与えていたことは確かである。ヴァレリーはバカロレアに合格し、ナポレオンの指揮によって新生を図られ近代的大学としての相貌を備えていた同大学の法学部生として入学を果たすが、ヴァレリーは大学という制度にいささかの希望も見出せなかった[25]。ところが、このモンペリエ大学がヴァレリーにとって大きな転機となる出会いをもたらすのである。奇しくも大学創設六百年祭式典の行われたモンペリエ近郊のパラヴァスにて、ヴァレリーは当時二十歳だったピエール・ルイスに初めて会い、さらにルイスの友人であるアンドレ・ジッドの知己を得ることになるのである。ヴァレリーが遠く仰ぎ見ていたマラルメに引き合わされることになるのも、ジッドの仲立ちあってのことである。それぞれに大きな文学的足跡を残すことになるヴァレリー、ルイス、ジッドとの間には頻繁に書簡のやりとりがなされるようになる。三人の間で交わされた書簡は、まさに青春文学の金字塔である。文学を志す若者としての情熱や衿恃、それ故はかなく傷つき易い内面をたずさえつつ、互いに己れの関心のありかや感動をつたえ合い、相手の理解を切に請い[26]、また時に相手

---

[24] Paul Valéry, 《Lettre de Madame Emile Teste》, *Oevres I*, p.35

[25] 『カイエ』の「教育」をめぐる項目には、近代フランスの大学制度への批判が多数書き込まれている。Cf. *Cahiers II*, pp.1551-1583

[26] 数々の書簡から見られる、相手に自分を理解してもらいたい、自分に関心を向けてもらいたい、手紙に返信してもらいたい、という思いの激しさは、時に同性愛的なものに接近しているように映る。ジッドとヴァレリーとの間には肉体的関係があったと推測する研究者もあるが、事実を断定することはできない。ジッドが同性愛者であったことは事実であるが、晩年にまで至る書簡のやりとりを追う限りでは、ジッドとの交流を続けながらもヴァレリーは何らかの線引きをして、もっぱら精神的な側面での交友に限ろうとしたと見るのが妥当であると判断される。

の才能に驚嘆したり嫉妬したりしながら交情を深め切磋琢磨していく様が書簡からは読み取れる。彼らが友情をあたためたとりわけ思い出深い場所がモンペリエの植物園である。

ジッドは『地の糧』において、自ら知る中で、もっとも詩情に満ちた場所の一つとして、このモンペリエの植物園のことについて触れ、次のように述べている。

> モンペリエの植物園。（略）僕は思い出す。アンブロワーズ[27]とともに、ある夕べ、ちょうどアカデミヤの園にでもいるかのように、糸杉にぐるりと囲まれた古い墓に腰をおろしたことを。バラの花びらを噛み締めつつ、ぼくらはゆっくりと語り合った。ぼくらは、ある夜、見た。ペイルーから、はるか遠くの海が月光を浴びて銀に輝くのを。ぼくらの回りでは、町の上水を湛える池の滝が音を立てていた。白い羽毛が房のようについた黒鳥が静かな泉水で泳いでいた[28]。

「古い墓」とあるのは、1736 年にフランスで客死した英国の詩人ヤングの娘、ナルキッサのもので、「ナルキッサの鎮魂のために」Narcisae placandis manibus との銘が刻まれている。ヴァレリーにとってもジッドと語り合ったこの場所は忘れがたいものであったに違いない。ヴァレリーはこの墓碑銘を、処女作である「ナルシスは語る[29]」のエピグラフとしている。70 歳になってヴァレリーは「『ナルシス連作』をめぐって」と題した講演の中でこの詩に触れ、「19 歳の頃、このモンペリエの植物園にしきりに行ったものでした」と述懐し、墓碑に刻まれたナルキッサの名からナルシスの名を連想し、ナルシス神話を源とする詩の執筆に着手したことを明かしている。そのナルシス詩篇着手直後に、自らの文学的人生を画するルイス、そしてジッドとの出会いを果たすことになったヴァレリーは、「ナルシス語る」を、彼らとともに創刊した詩の雑誌『コンク』にまず掲載することになるのである。ヴァレリーはこの講演において、「ナルシス語る」について次のように語っている。

> 五十年を経てこの「ナルシス連作」第一作を眺めてみると、詩から遠ざか

---

[27] ヴァレリーの洗礼名。ヴァレリーの戸籍上の名前はPaul-Ambroise Valéryである。
[28] André *Gide, Nourriture terrestre,* Gallimard, 1897, p.57
[29] Paul Valéry, *Oeuvres I,* pp.82-83

り全く別の道をたどって精神形成をしなかったとしたならおそらく詩に関して恐らく自分が成したであろうようなことの標本のように映ります。この詩は私にとって、当時の理想や方法の特徴的な第一歩であり続けています[30]。

ヴァレリーが若き日、最初の詩のインスピレーションを得たこの植物園は、自らを島のように感じ、自らの感受性を信じ、美を精神の糧として[31]密かに自らの内面を育み続ける一方、芸術への夢を語り合えるかけがえのない友を得たモンペリエ時代のヴァレリーを象徴する場所であると言ってよいかもしれない。

3．ジェノヴァの風光

地中海の小都市セート、続いて中都市モンペリエに移ったヴァレリーは、父バルテルミー（1887 年 3 月死去）亡きあとのヴァレリー家の大黒柱となっていた十歳年長の兄ジュールが教授資格試験を受験するのを機に、1891 年 9 月、初めてパリへの上京を果たし、その後パリでのホテル逗留とモンペリエへの帰郷を何度か繰り返した後、本格的にパリに本拠を定めることになるのだが、パリという土地の経験については次節において詳しく見ていくとして、その前に、ヴァレリーの自己形成にあたって大きな意義を持った二つの都市に目を向けておきたい。

二つの都市とはすなわちジェノヴァとロンドンである。いずれも母方の家系とのつながりのある地である。前述のごとく、ジェノヴァは母親の生地であり、ヴァレリー一家は、バカンスの際、伯母ジェノヴァ駐在のベルギー総領事の妻であったカベッラ夫人の家に泊まるのが常であった。またロンドンは、やはり伯母のポーリーヌ・ド・ランが住む町である。ヴァレリーは 1994 年および 1996 年に単身ロンドンに渡っている。ヴァレリーは 1910 年の『カイエ』に「ジェノヴァ、ロンドン、私が魅了された街[32]」「ここで私は子供にして、異邦人」と書き記している。しかし、この二つの町は、ヴァレリーが精神的危機に遭遇した町でもあるのである。

セートに暮らしていた幼いヴァレリーにとって、同じく海を見下ろすが、建

---

[30] Paul Valéry, *Oeuvres I*, p.1560

[31] ヴァレリーは晩年に、1890年代という時代を振り返り、「美が精神の不可欠の糧であったような時代」と述べている。

[32] Paul Valéry, *Cahiers I*, édition établie et présentée et annotée par Judith Robinson-Valéry, Gallimard 1973, p.104

物の壮麗さにおいて比べ物にならないジェノヴァは圧倒的な印象であったようだ。ヴァレリーはジェノヴァにおいて「建築というものの力」を知ったと後に述懐している。モンペリエに転居した後もジェノヴァでバカンスを過ごすことになるが、その様子を述懐しヴァレリーはヴァレリー・ラルボー宛ての 1928 年 8 月 15 日付けの手紙で次のように書いている。

> 軽い昼食を取り、コーヒーを飲み終わったら、早速、海です！男の子たちも女の子たちも三、四時間、岩に囲まれた暖かい深い海で過ごします。岩に登っては水に飛び込むのをきりなく繰り返すのです。それから、オールや帆がからまっている薄暗い一種の海の洞窟で着替えます。あの親密な太陽と差し込んでくるような水、そして半裸状態で蕩尽される生命、熾烈に費やされる時、そうしたものの印象…それらは長らく私の源泉であり、理想状態であり続けました[33]。

いとこたちも多く集まるイタリア的な大家族集団の中でのバカンスを、自然の中で無邪気に楽しんでいるヴァレリーの姿が浮かぶであろう。もちろん、ヴァレリーにはセートの海での海水浴の思い出を鮮やかに語った文章[34]もあるが、ジェノヴァでの海水浴の幸福感は、いとこ仲間たちに取り囲まれての集団の経験に由来するところに特徴があろう。

また、地方の中流下層の核家族として暮らしていたヴァレリー家とは違って、母方のグラッシ家はイタリアの旧家としての文化的資産もあり教養豊かで、建築家のパローディとも知り合いであった。そのような知的な雰囲気の中でヴァレリーは、ジェノヴァの様々な文化的遺産に馴染んでいった。モンペリエの級友フルマンには「絵画で一杯の邸宅をたくさん訪ねたよ。中でも、フランス、オーストリアと次々に連合を組んだガレー船の提督である有名なアンドレ・ドリアの邸宅。そこで僕は、14 世紀のサロンというものをくまなく見たよ！当時の古い絵で一杯のね。僕は、まずシャルル・カンが、そしてナポレオンが坐った肘掛け椅子に坐ってみたよ[35]。」と書き送っている。歴史の遺産が身近に感じられる環境に高揚感を抱くヴァレリーの姿が浮かぶであろう。

もっともヴァレリーが 20 歳にもなると、ジェノヴァの文化的遺産の潤沢さに

---

[33] Paul Valéry, *Lettres à quelques-uns*, Gallimard, 1952

[34] 例えば「地中海の感興」の中の「泳ぎ」と題された散文詩に近い文章など。*Oeuvres I*, pp.1090-1091

[35] Gustave Fourement Paul Valéry *Correspondance* (1887-1933) Gallimard, 1957, p, 43

辟易する感想も漏れてくる。ジョノヴァ滞在中のヴァレリーの 1892 年 9 月 21 日付けのジッド宛書簡を引用しよう。

> 類稀な稀集家、英国人のミリウス氏と彼のところでタバコをふかしては夕べを過ごすことが多いが、その家というのが、さながらクリュニー美術館といった感じで、真っ直ぐに空に開き、海に面している。この人物は数々の一品を持っていて、ゴンクールが見たら嫉妬の余り死んでしまいそうな代物だが、それを天晴れな無関心、身についたダンデイズムのうちに何ということもなくただ眠り、生きるのに使っているのさ。
>
> ここでは、要するに、僕は何も見ない。イタリアがあまりに近く触れてくるのでその全体の基調を君に伝えることもできない[36]。

これは、ほとんどデカダンスの経験であるといってよい。無論、文化的豊かさの背景あってこその憂鬱である。穿った見方をするならば、都会人であるジッドを前に、田舎者めいた感嘆の仕草はすまいとの自戒が働いていた可能性も否定しきれない。ともあれ、この手紙を送ってほぼ二週間後に、ヴァレリーは「ジェノヴァの一夜」と称される危機を通過することになる。それは、雷鳴と不安の一夜（10 月 4 日夜から 5 日にかけての夜に激しい雷雨があったことが兄ジュールのメモに記されている）に、あたかも啓示を受けたかのように文学の虚しさを感得し、詩人としての筆を断つ決心をしたとされるものである。少なくともヴァレリーは後年、そのように振り返っている。この危機には、モンペリエの町で見かけた貴婦人[37]への、ひとことも打ち明けられないでおわった激しい恋情に翻弄されるがままになってしまった自らの感情や精神への不信の念が底流にある。そこに、自らの才能への確信のなさと、折からの激烈な雷鳴と嵐とが重なって、ヴァレリーは自己処罰の思いに駆られたのである。しかしこの危機は、ヴァレリーを新たな一歩へと踏み出させるものであった。ヴァレリーは、「ジェノヴァの一夜」の経験をへて、自らの中の「曖昧なものの領域を縮減」することを自らに課すに至る。そしてこの決意が精神の厳しい鍛錬としての『カイエ』執筆へとつながっていくのである。この一夜がなければ、ヴァレリーはいつま

---

[36] André Gide-Paul Valéry, *Correspondance 1890-1942*, Gallimard, 1955, pp.173-174

[37] この貴婦人の名はヴァレリー研究者の手によりロヴィラ公爵夫人（Sylvie Rovira）であることが突き止められており、パリ国立図書館草稿部には、ロヴィラ夫人をめぐるヴァレリーのメモが所蔵されている。

でも象徴派の亜流のような甘ったるい詩を書き続けるばかりだったのかも知れない。

ミシェル・ジャルティのヴァレリーの評伝には、ヴァレリー家に残されていたという、この嵐の一夜をヴァレリーが過ごした建物の写真が収められている。古い歴史を感じさせる石畳の坂を上りきった所にこの建物は立っている。坂を上り降りする男女の姿にもゆったりとした品格が認められ、活気を排除しない閑静さが写真からは感じられる。写真には、嵐の夜、ヴァレリーが海を眺めていただろう窓も映っている。前述のごとく、後年になってヴァレリーはジェノヴァの町をお気に入りの町として挙げているが、おそらく「ジェノヴァの危機」がトラウマだけを残していたとすれば、ヴァレリーはジェノヴァの町への愛着を語ることはなかったであろう。危機とそれ以後の人生における危機の乗り越えあってこそ、この町への愛着を語ることができたのではなかろうか。

ヴァレリーがジェノヴァについて語った最もまとまった文章は、1910 年の「ゆくりなく筆のままに」である。1910 年 8 月、百日咳を患いジェノヴァへの転地療養をすすめられたヴァレリーは、すでにジェノヴァ滞在中だった母を訪ねていくことになる。その際の印象に基づいて書かれたものであるが、病の回復期にある、普段にもまして鋭敏な感覚がジェノヴァの町を捉えていて、忘れがたい文章である。

> ジェノヴァ、猫の町。暗い街角。
> 十三世紀から二十世紀にかけて、町の建設が絶えず行われていたことが眼のあたりにわかる。
> 　隅々まですっかり見渡され、それ自体に対して現前するこの都市。海、岩、スレート、レンガ、大理石と絶えず親しみ、山に対し、果てしない働きかけを営んでいるこの都市。―しかもコロンブス以来たえずアメリカ的で[38]。

これが、文章の冒頭である。都市という、本来一つの対象として表象しがたいものを、まずは、「猫の町」という正面切ったというよりは裏道からのアプローチで切り取って見せ、ついで地理的、地質的な概略を大づかみに示し、わずかに歴史の要素をにじませている。言葉遣いはシンプルなようでいて、視点の転換の自在さは特筆に価する。

---

[38] Paul Valéry, *Oeuvres II,* édition établie et annotée par Jean Hytier, 1960, p598

次に続くのは、町を文字通りさまざまな角度から眺め描写するもので、水彩作家[39]としてのヴァレリーの眼の働き、さらには筆の運びまでが感じられる文章である。

教会を頂く円錐形の丘ーくすんだ緑色の丘。
ばら色の玩具のような、透き通った色をした歯のような、小さな家々。
円錐形をした四十五度の暗い坂道。
背後には、灰色とばら色を混ぜたような色彩のファスチ山、これは象のごく普通の色だ[40]。

続いてヴァレリーは、町の人々の生活に目を転じていく。ヴァレリーが足を向ける先は、観光客向けの場所よりも都市の生々しい息遣いに触れることができる裏町である。

街区。ここでは、裸もしくは半裸になり、窓を開け放した自分たちの部屋の前で商売している淫婦たちのまわりで、子供たちが遊んでいる。通りの小商いに似た売春が行われているのだ。栗とか、いちじくとか、エジプト豆の粉をまぶした途轍もなく大きな金色のタルトを売っているおかみさんたちと同じようにして、そのかたわらで淫婦たちが自らの天性を商っているのである。これらの奥深い小道に営まれている底知れぬ生活のなかに歩みこむのは、ちょうど海のなかへ、動植物が異様なほどひしめく広い海の暗い底へ潜りこんでゆくのに似ている[41]。

この海の底へと降りていく、身を潜めて下降していく身振りこそが、ジェノヴァの町の深部に触れることを可能にするのである。引用が長くなるが、更に先を辿ってみよう。

アラビアの物語のような感じ。ー濃厚なにおい、冷ややかなにおい、香料あり、リーズあり、コーヒーを炒る香りあり、苦味をたちのぼらせながら丹

39 ヴァレリーはデッサンや水彩画をたしなんだ。ヴァレリーの眠るセートの墓地の裏手にあるポール・ヴァレリー記念館には、彼の水彩作品が多数展示されている。
40 *Ibid.*
41 *Ibid.*

念に焙じられるココアのにおいありといった具合で。――のみで細い溝を刻みこんだ大理石の上を足早に過ぎてゆく通行人たち。―裏町は上のほうにむかって這い登り、レンガと砂利のリボンで飾りたてられている。―糸杉の列、小さな円屋根が並んだようでもあり、修道僧が並んだようでもある。

芳香をただよわせる料理。―すさまじい大きさのパイ、エジプト豆の粉の料理、サラダ、鰯のオイル焼き、捏粉をまぶした固いゆで卵、ほうれん草のパイ、フライ。―このまことに古めかしい料理。

ジェノヴァ、それはスレートでできた競技場だ[42]。

以上の記述では、嗅覚という最も原始的な感覚の列挙のあと、風景と町行く人々が一つのタブローの中に切り取られ、次は、嗅覚、味覚へと訴える記述が続く。最後の一行では、ジェノヴァ全貌が一つのフレームに入るように遠隔から捉えられている。町全体を「競技場」というスペクタクルの語彙で捉えるところから、人生の根本にある「運」や「賭け」や「遊戯」といった次元が浮かび上がってくる。

こうした町の記述から感じ取られるのは、町の観察者としてのヴァレリーの特異なありようである。ヴァレリーは時に遊歩者であり、時に地質学者であり、歴史家であり、時に画家であり、時に飛翔する鳥のようでもある。こうした視線の自在な転換が町の描写を成立させている。そして「ゆくりなく筆のままに」のジェノヴァの記述は、ただ明晰なだけの描写文に終わってはいない。何かが起こりそうな予感やドラマを孕んでいる。散文の形をとっているが、限りなく散文詩に近いものなのだ。このエッセイが短編の名手であったヴァレリー・ラルボーに捧げられているのは偶然ではないだろう。ヴァレリーは「伯爵夫人は午後５時に出かけた」といった類いの、小説という形式にまつわる恣意性に釈然としないものを感じ続けた。ヴァレリーは、あれやこれやの筋立てがなくとも、風景そのものに充分にドラマを読み取ることができた人間なのであり、虚構を作ることに意を注ぐよりも、風景にドラマを読み取るような感受性をこそ研ぎ澄ますことを人生の習慣としていた人間だったのではないだろうか。ヴァレリーにとって、仕事や生産性から離れて過ごす場所だったジェノヴァの町は、そうした風景のドラマを読む、恰好のレッスンの場であったに違いない。

---

[42] *Ibid.*, pp.598-599

４．ロンドン―ビジネスと詩と

「ジェノヴァの危機」によって「曖昧な領域」との訣別、詩との決別を決意したヴァレリーは、1892 年 11 月に、兄と母が暮らすパリのゲー・リュサック街のアンリ 4 世ホテルへ戻った。これはまさしく仮住まいであり、ヴァレリーは何かよい職があれば、どこにでも行く用意であった。ヴァレリー一家が逗留していたホテルは決して豪勢なものではなかった。ホテルとはいえ実際には二つの形態の部屋があって、伝統的なホテル形式のものと、ドゥミ・モンドの住む家具付アパートが並存しているというありさまで、「一番まじめな人間」（すなわち将来を嘱望されている学生）と「一番尻軽な人間」（すなわち娼婦）との雑居[43]、と後にヴァレリーはこの逗留ホテルを回想している[44]。そのような落ち着かない生活の中、詩人エレディアの紹介でパリ万博の準備に関わる仕事の声もかかるが、この計画は実現しない。外務省の秘書として働かないかという話もあったが、これも頓挫する。ヴァレリーは定職のないまま、『カイエ』の執筆をはじめたり、パリでの交友を広げたり、モンペリエにしばらく戻って逗留費を節約したりしつつ、何とかパリ逗留生活を続けていくが、1894 年 6 月、ヴァレリーは思い立ってパリ生活を中断しロンドンに渡る。

ロンドンという町の選択の背景には、母方の伯母が住んでいたこと、また彼にとってロンドンがいわば反ジェノヴァの町であったこと、そして師と仰いでいたマラルメが英語教師であり、英国に知己を持っていたという事情がある。ヴァレリーは 6 歳の時に家族とともにロンドンを訪れたことがあるが、船酔いと蝋人形館の不気味さと、妖精めいたオペレッタの印象しか残っていなかった。ロンドンは未知の街に等しかったのだ。ヴァレリーはいとこたちの住むロンドン郊外の家に居候する。1925 年に、ヴァレリーは当時を振り返り、次のように述べている。

> ある日突然わたしは、マラルメがしばしば「素晴らしく魅力的」などと評していたその都市に行ってみたくなったのです。当時フランスの芸術家たちはロンドンについて奇妙に優しく楽しいところだというイメージを抱いていました。彼らはロンドンがまるで淫逸な愉しみに満ちた快適な家々の連なるバベルの都のように思っていたのです。そうした都のイメージは彼らのたくま

[43] 1927年モナコでの講演の記録による。フランス国立図書館草稿部分類番号Naf19049、Folio 38
[44] Paul Valéry, *1894 Carnet inédit :dit《Carnet de Londres》*, Gallimard, 2005, p.143

しい想像力の中で、ターナーの大作やディゲンズの小説の中で遭遇するイメージと重なっていたのです[45]。

おそらく、求職しながらのパリのホテルでの逗留生活には滅入る部分もあったのであろう。親戚の家に居候しながらの異国の首府探訪は、一見気侭なようでいて将来への不安や焦燥に常に包まれていたモラトリアム青年ヴァレリーに、もっとゆったり構えていいのだ、と優しく諭すようだったのではあるまいか。ヴァレリーは次のように述べている。

ロンドン滞在中、わたしは街の中心から遠く離れたハイベリー地区に住んでいました。窓下には広大な芝生が広がっていて、それが六月の金色の朝日を浴びて、やわらかく輝いていました。そこはクレッセントと呼ばれていて、時々フットボールの試合が行われたり、散策する人々が寝転んで、気ままに日光浴（ファルニエンテ）したりする姿がよくみられるところでした。そんな気侭な日光浴が南欧以外の地で可能だなどということは、それまで思ってもなかったことでした。実際わたしが北にも怠け者（ラザローニ）のいることを発見したのは、ある日そうした人々の姿をそこに目撃してからのことです。私はロンドン市内を朝から晩までほっつき歩き始めました。全く孤独でしたが頭の中には様々な想念がかけめぐっていました。何の目的もなしに、あてもなくロンドンの街路を歩きまわるのが私には楽しかったのです。ロンドンの街路は人でごったがえしているか、でなければ閑散としすぎているかどちらかでした。私にとっては、ロンドン的知的陶酔とでもいうべきものがありました。ロンドンで私はあらゆるものに興味を抱き、面白がったといえると思います。それ以来、私の心の中には、一般には決してとくに陽気な気分をかきたてるようなものとは見なされないロンドンとか英国とかいったものが、いわく言いがたい一種の活力ある陽気さとでもいうべき全体的な印象となって想い起こされるようになったのです。ロンドンと言うとき目に浮かぶものは一黒、赤、ガラスの光る白、そして広大な緑の広がりといったものです。

訳文ではルビにしたが、「ファルニエンテ」はイタリア語で「何もしない」の意であり、休日などを一日中戸外で日光浴をして何もせずに過ごすことを指し、

[45] *Ibid.*, pp.143-144

「ラザローニ」も同じくイタリア語で、「やくざもの」の複数形（ここでは、「怠け者」という軽い意味）である。当時資本主義の先端を行っていたイギリスの首府で思いがけず、享楽的なイタリアの風俗と同等なものを見出したことを、ヴァレリーは面白がっているのであろう。ヴァレリーはここでロンドンという街を、細部の積み重ねとしてではなく、全体からかもし出されるイメージとして捉えようとしている。街のメンタリティを「活力ある陽気さ」と総括し、緑と調和したアクセントある町の色調を抽出している。こうしたことは、ホテル逗留中だったパリの街に関しては為されていないことである。このような知覚は、閑雅あってこそということなのだろうか。

ヴァレリーは求職という当面の課題から離れて、ロンドンでは眼の逸楽に心を委ねているようだ。ヴァレリーはテムズ川越しに垣間見た火事さえ、美的な光景として受け止めるのである。以下の文章を見てみよう。

> ペネル夫人の家の窓からはテムズ川が見下ろせました。会話の合間に、お客に来た人々はそこから、六月の夜に浮かび上がる川とその青い広がりの素晴らしい眺望を楽しんでおりました。ある晩、十一時頃、薔薇色の輝きが空を煌々と照らしたのです。それは絶えてないほど美しく幻想的な光景でした。フィンズベリーの方角に大火事が発生したのでした。炎は見えませんが、火が空にあかあかと照り映えて、大気を一面に薔薇色に染めているのでした。まるで夢にみるようなロンドンが我々の眼前に広がっていました。わたしたちは紺青のマッスや巨大な青緑色や瑠璃色の形象を見ていました。セント・ポール寺院のドームは明るい空を背景に黒々と浮かび上がっていました。そこにターナーやホイッスラーが心に抱いていた野心を同時に満足させるようなまたとない傑作をみているような感慨に襲われていました[46]。

ここでヴァレリーは惨劇に心を痛めることはなく、惨劇の生んだ稀な光景をただ美的に鑑賞するばかりである。訳文では表現し得ないが、最後の文章の主語は on である。その直前の文章に「我々」と示されているので、on を「我々」を受けるものとして取ることも不可能ではないが、そこにいた人々皆が皆、火事の模様をターナーやホイッスラーの作品に比するようなものとして受け止めたとは考えがたい。むしろこの on の使用は、風景に見入るうちにヴァレリーの

[46] *Ibid.*, p.144

個別的な主体としての意識が抜け落ちて、非人称的、匿名的な存在へと転換してしまったことを示すものなのではなかろうか。美がたちあらわれるとき、人称的存在が消失するというのは、ヴァレリーの感受性の基底にある事態である。

ロンドンの印象の中でもヴァレリーにとって特に強烈であったのは、この美しい火事の光景とともに、証券取引所や金融機関の集まるシティーの光景であった。ヴァレリーは、同年6月9日付けのジッド宛の手紙に、高揚した調子で、次のように書き送っている。

シティーは次のように示唆している。

いつの日にか、人々は、おそらくこの地を、そこにいる人間と装飾とは、われわれが自分を燃え立たせる歴史上の事物、灰となりしかもそこに炎の見える事物を眺めるのと同じ具合に、見ることになるだろう。そうなのだ、君、商売、そしてここでの商取引は現代においてもっとも情熱を注ぎこまれた、もっとも「自然な」、もっとも崇高なものなのだ。そして、皮肉をこめて確認するのだが、例えば、いかなる芸術家もそこに足を踏み入れてはいない。第一、何も判りゃしないだろう。ゾラか！…

思うに、ここには現代の最も深いからくり、精神にとって複雑きわまりない立派な婚礼が繰り広げられている。これ以上に夢想を続ける暇は僕にはなかった[47]。

ヴァレリーがモンペリエ時代から愛読していたユイスマンスのエッセー「いくたりかの人々」にはパリの証券取引場を皮肉に資本主義のカテドラルと捉えた表現があるが、ヴァレリーがシティーに「現代のもっとも深いからくり、精神にとって複雑きわまりない立派な婚礼」を見出したというのは、恐らく皮肉や逆説ではないだろう。このロンドン渡航からしばらくして書き始められることになる「テスト氏との一夜」のテスト氏が株屋であるのは、おそらくこのシティーでの経験が与っているであろう。また同作品中テスト氏が口にする「金とは社会の精神のようなものだ[48]」という謎めいた言葉も、株式の取引の中に精神の深い反映を読み取ったシティーでのヴァレリーの感慨に響きあっている[49]。

---

[47] André Gide-Paul Valéry, *Correspondance 1890-1942*, Gallimard, pp.205-206

[48] *Oeuvres II*, p.23

[49] ジェノヴァの危機を通過し、詩との訣別を決意し、こうして商取引きの現場に精神の精妙な現れをみて興奮するヴァレリーを、詩を捨て商人となってアフリカに渡ったランボーに重ね合わせることができよう。

ヴァレリーはこのロンドン滞在で、詩人メレディスをはじめとしてマラルメとつながりのある文人・詩人・芸術家たちと接触しているのだが、むしろ文学や芸術の側面よりも、ロンドンの街の資本主義の骨格と活気に強い吸引力を感じたようである。帰国後、ジッドに当てた7月14日付けの手紙にヴァレリーは次のように書いている。

> あちらでは高揚を感じる、いや、むしろ、しかるべき時が来れば高揚しうるに違いないと感じる。何にもまして、シティーが、商取引が僕を魅了したのだが、じっくり探求する暇がなかった。あそこには機関室、あるいは心臓の内部の雰囲気がある。僕らの時代の英雄はあそこにいるのだ。そして情熱に捉えられたもの、計算をとことんまで突き詰められたものを、重罪裁判所においてよりも容易に目にるすために、我々がロヨラとかトリスタンとかペルセウスとかを引き合いに出している間に一かの一隅は現代の痕跡としての他のいかなる光栄をもいかなる動きをも消し去ってしまう用意があるのだ[50]。

ジッドは、ヴァレリーのこの高揚感にどう反応したものか、共感しようがなかったと見えて、ジッドの返信には、シティーだの商取引だのといった話題は一切触れられていない。そもそもヴァレリー自身もそのようなことに高揚する自分が、いかにも象徴派風なロマンチックな夢を語りジッドと交友を温め始めたモンペリエ時代の自分とはかけ離れているということに気づいていて、友を置き去りにしはしないかと不安になったのだろう。以上に引いた手紙の文章に続けて「思い出してくれたまえ、モンペリエでの僕らの散歩を」と書き付けているのである。

ヴァレリーは1896年、再度ロンドンに渡ることになるが、今度は南アフリカとの商取引を行うチャータード・カンパニーの翻訳係としての任務を負ってのことであった。仕事のオファーは突然であり、ヴァレリーは即日のうちに電報で返答をして夕方には出発し、翌日にはロンドンのヴィクトリア駅に降り立っている。ヴァレリーは当時を述懐して、「私のトランクは、少しでも運命の招きがあればそれに応じていつでも出発できるようにと、常にベッドの足下においてありました。わたしはこの停滞した生活に転機をもたらしてくれそうな呼びかけや外部からの接触にはいつでも従えるよう体制をととのえていたのです[51]。」

---

[50] André Gide-Paul Valéry, *Correspondance 1890-1942*, pp.208-209
[51] Paul Valéry, *1894 Carnet inédit :dit《Carnet de Londres》*, p.148

と述べている。

ヴァレリーはチャータード・カンパニーの社長のセシル・ローズの知性と実行力に深い敬意を抱き、その事務所で働くそれぞれに一風変わった人々の出入りを実に興味深く垣間見ていた。しかし、霧のロンドンの冷気に当てられたヴァレリーはインフルエンザにかかり、やむなく英国を後にしなければならなかった。しかし、この滞在中に「ザ・ニュー・レビュー」誌の編集長 W・E ヘンリーの知己も得、ヘンリーはドイツの市場進出の問題に関して何か書かないかと持ちかけてきた。それがきっかけとなってヴァレリーはドイツ論である「方法的制覇」を発表することになるのである。また、文明論の古典である「精神の危機」が最初に発表されたのは 1919 年、イギリスの雑誌「アテネーウム」誌上である。後の流れから見ると、ヴァレリーのロンドン滞在は、文明論者としての潜在力を開化させる触媒として働いたことになる。

だが、ヴァレリーは植民地の開発をも視野に入れたロンドンの一企業で働き、世界の経済の動向にリアルな目を向けながらも、彼の内面は大きな危機に襲われていたのである。象徴派風の詩人から帝国主義的企業の尖兵へと転身を遂げる軋みであろうか、霧に包まれるロンドンの気候が欝を誘引したのだろうか、ヴァレリーは自殺未遂を起こす。

> ある日、私はロンドンで、死にたくなった。日の光は黄色く地獄を思わせた。煙が低い屋根から通りに降りてきて渦巻いた。ある日曜日のこと、紐を探そうと引き出しを探っていると、オーレリアン・ショルの本が出てきた。笑いがこみ上げてきて、私はそれで救われた[52]。

ヴァレリーはこのように 1924 年のカイエに記しており、同様のことをシルヴィア・ヴィーチやドロシー・ビュシーにも語っているが、未遂の日付を特定することはできない。思い詰めていたのか、まったく発作的なことだったのか、本当のところはわからない。しかし、ヴァレリーは再びロンドンを訪れた 1927 年に、往時のロンドン橋での感懐を謳った散文詩を書いている。そこには、1896 年当時の心境が映し出されているのだろうか。悲痛な声が響いている一篇である。この散文詩の解釈は容易ではないが、ヴァレリーのロンドン橋の場所の経験という視点から、しばし、この詩をたどっていくこととしよう。

---

[52] Paul Valéry, *Cahiers X*, p.443

「私」は、ロンドン橋で立ち止まり、「豊かで重く複雑な[53]」水に見入っている。「私」は欄干に肘をつき、見るという享楽にひたるが、背後に「生活に直結したものに永遠にひきずられていく盲者たちの見えない一群が絶えまなく行過ぎるのを[54]」感じる。人々は固有の履歴や神を持つようなかけがえのない存在とは映らない。テムズ川の流れを見、群衆の行過ぎるのを感じ取るという、水都ロンドンでの何気ない、それ自体はありふれた経験が、ヴァレリーに罪障の感覚を呼び起こしていく。散文詩は以下のように続いている。

> 私は知らず知らずのうちに、自らの肉体に隠れ、自らの眼に隠れ、何とは知れない虚無に駆られて、群衆を等質な「夥しい粒」と化さしめていた。私は音もなく急ぐ群衆の流れが坦々と橋を渡っていくのを耳にしていた。誇りと不安が入り混じり、これほどの孤独をかつて感じたことはなかった。それは、群衆と水とのはざまにあって夢見るという奇妙で漠とした感覚だった。私はロンドン橋の上で詩の罪を感じていた[55]。

ヴァレリーの言う「詩の罪」とはどういうことなのだろうか。散文詩を読み進めていくと「遠ざかる存在にはすべて罪深さがある。物思う人間はいつも、住み得る世界に『抗して』物思う。自分から拒否しているのである。遠ざかる存在は近きにあるものを永遠に遠ざけているのだ。」という言葉が現れる。このような言葉と照らし合わせてみると、かつて深く詩への憧れを植えつけられた青年が、塵芥に立ち混じり働き稼ぐ生活を続ける中で、現実に抗し、遠ざかっていこうとする動きをはらむ「詩」というものの、群衆の生活力の如きものからは切り離されているありように、ある種の傲慢を感じるに至ったということではないのだろうか。この散文詩は上述したとおり 1927 年、すなわちヴァレリーが 20 年の沈黙ののち詩人として脚光を浴び初めて数年経った後に執筆されたものであるが、この散文詩は、言ってみれば詩から商業へ赴こうとしていたロンドンでのアルバイト時代のヴァレリーの心情の底を流れていたものが、水と群衆という不定形なものの経験をきっかけとして顕在化し、時を隔てて言語化され成立したものであると言えるだろう。

散文詩では更に、突然すべてのものが通常の効果を失って、理解しているは

---

[53] *Oeuvres II*, p.512
[54] *Ibid.*, p.513
[55] *Ibid.*, p.513

ずのものが消え去ろうとする、そのような瞬間が描かれ、「私はロンドン橋にいながらにして不在である[56]。」という言葉で、意味が宙吊りにされたまま結ばれている。おそらく、ジェノヴァの危機でなされた詩との訣別の決意によっても、消えないで残ってしまった詩への想いというものがあり、ヴァレリーはロンドンの帝国主義的企業でのアルバイトをするという形を取ってできるだけ「詩」のようなものを自分から遠ざけようとしていたが、結局、ヴァレリーは「詩」に回帰することになり、後年ヴァレリーはロンドンでのアルバイト時代に抱いた「詩の罪」の認識さえも、散文詩として作品化したのである。

5．パリの憂鬱と栄華と

以上に、ヴァレリーが人生の折節を過ごし、とりわけ愛着の深かった二つの都市での経験について触れたが、本節では、ヴァレリーの生涯の本拠地となるパリという場所の経験について考察してみたい。パリ上京の出発点から始めるために、時間の針をモンペリエ時代にいったん戻そう。

法学部生でありながらも将来へのはっきりした展望もなく、美や芸術への渇望のみが切実で、詩人としての一縷の希望を抱きつつも、人一倍の不安とコンプレックスにさいなまれて南仏の中都市で悶々とするばかりだったヴァレリーは、1891 年にピエール・ルイスやアンドレ・ジッドという友人を得たことによって、マラルメに自らの詩を送るという行動に出る勇気を持つことができた。マラルメはヴァレリーの才能の片鱗を見出し、二人の間には手紙のやりとりが始まるが、ついにヴァレリーは同年 9 月 19 日に、母と兄ジュールとともにパリに上京し、10 月 24 日にモンペリエに戻るまでゲー・リュサック街のアンリ四世ホテルに滞在し、その間にユイスマンスやマラルメに会っている。

パリ到着後数日してヴァレリーは「友よ、僕はいつにもまして長文の書簡が必要であり、それに飢えているのです。」で始まる切迫した調子の手紙をジッドに送っており、以下のようにヴァレリーはパリの印象を語っている。

> 僕はやや狼狽しています。パリに上京してきて、ここがますますきらいになっているのですが、このパリはぼくのまわりを川のように流れています。しかも轟々たる忘却が沸き立っているレテ川といったところです。群衆が主人顔で脳髄の中にずかずかと入りこみ、ここでの才能は恩知らずの流れに逆

[56] *Ibid.*, p.514

らってもがくおぼれかかった人間の素手に望みを失った腕をニョッキリ出している姿に見えます。―この流れは心のうちの神殿を浸し、個人を社会の物にしてしまう、本来はその逆であるべきなのに。君にはわからないでしょう。君の魂にとってそのほうがよいというものです。

君は、精神の美を高揚させ、はるかな崇高さのうちにあって愛するがよい。長い長い書簡を待っています[57]。

ヴァレリーは、パリという都会の時間の流れの速さと、個がないがしろにされてしまうかのようなありように大きな脅威を覚えている。その拒絶的な反応は、あたかも敏感すぎる計器の如くである。パリの生活に馴染んでいるジッドに対してヴァレリーは、君にはそのような脅威は感じられまい、と挑発的に述べつつも、大都会の脅威を前に狼狽している自分に、何らかの言葉をかけて欲しいと懇願せずにはいられなかったのである。

パリを離れラ・ロックの別荘にいたジッドはヴァレリーへの手紙に応え、「パリでは手酷い失望を味わったことと思います」とか「自分の逃げ出してきたこのパリが君に何をしでかすか、それが心配です。パリは君の内部で悪臭を放つ泥をかきまわしてしまう。そんなものはそっと知らずにすまそうと努めているのに」といった言葉で、ヴァレリーへの理解を示しながらも、健全な都会人たるジッドは、パリを楽しんだらどうか、と付け加えることも忘れていない。

パリでは活気に満ちた生活がときにあまりに常軌を逸していて、美しいといえるほどです。今でもパリの生活はぼくを余りに楽しませるので、充分に軽蔑することができないのです。

クリュニー美術館、ロップスそのほか、エジプト及びギリシャの陶器、大聖堂の宝物、サント・シャペルのフランボワイヤン様式の焼き絵ガラスを見ましたか？

こういうものを前にしている君を夢想しています。いまだかてなかったほどアムブロワーズたる君をね[58]。

このように、ヴァレリーの不安に充分な理解を示した上で、パリ滞在を有意義に過ごしてほしいとジッドは親身に書き綴っているわけだが、ヴァレリーは

[57] André Gide-Paul Valéry, *Correspondance 1890-1942*, pp.128-129
[58] *Ibid.*, p.129

ジッドに美術館見物の印象を書き送らないばかりか、ひねくれた罵倒の言葉を返すばかりなのである。

やっと！光り輝きいかにもばかげたこの大通りに面したとあるカフェにいともすさまじき避難所を見つけて、有象無象のペンとを手に入れましたが―それは貴兄を罵倒するためなのです[59]。（ジッドの手で 1891 年 10 月 6 日の日付け）

ヴァレリーが立腹しているのは、どうやらジッドが自分以外の人物（カミーユ・モクレールと推察される）に内密な調子の文章を書き送ったらしいことを聞き及び、それに嫉妬してのことであるらしいが、ともあれ、相変わらずパリの印象は負の琴線に触れるものではあれ、ヴァレリーはジッドへの手紙にパリ見物の感想など一切記していない。とはいえ、ヴァレリーも人並みにパリ見物はしているのである。モンペリエの駅でパリに出発するヴァレリーを見送ってくれたギュスターヴ・フルマンに宛てた 9 月 23 日付けの手紙で、ヴァレリーは次のように記している。

この町は、ぼくにはいかなる思考も立ち騒がないうつろな街だ…ここでは、宮殿に収められたかくも多くの一品が、通りという名の騒音と照明の河によって夢から遮断されている…先刻、ぼくらはジョコンダを見た、そして今は、…（略）…

ほらあそこにサント・シャペル、ほらあそこにノートルダム、…（略）…

ああ！ぼくが何を見たか君に言えない、だっていまだ何も見ていないんだから…おお！美しきものよ―でもぼくはむしろ退屈してしまう。(1891 年 9 月 23 日)[60]

この書簡の後半部には、印象に残ったものとしてギュスターヴ・モローの『オルフェ』、ピュビス・ド・シャバンヌの『漁師と生ジュヌヴィエーヴ』、（マネの）『オランピア』、ロダンの女性の胸像、サン・ジェルマン・ロクセロワやノートルダムの細部、といったものが列挙されてはいる。故郷にいる友にパリの美しい部分を伝えようとの配慮であろう。しかし、ヴァレリーの初めてのパリ滞在

[59] *Ibid.*, p.130

[60] 『ヴァレリー全集　補遺1』436頁、恒川邦夫訳

の印象は、ジッド宛の書簡と照らし合わせてみても、混乱であり、過剰であり、不安であり、疲労感であったのは疑い得ない。フルマン宛のこの書簡には次のような追伸が付されている。

> 今のご時世に、陽気な浮かれ女や乗り物、最後には胸が悪くなるような美の氾濫には煩わされることなく、宇宙をその全体の相において眺め暮らす真面目な人間として僕に語ってください[61]。

一連の書簡をやりとりを見る限りでは、南仏の地方都市で静かに内面の島を培いつつあったヴァレリーにとって、パリという都会はあまりに刺激的な触媒として急激に働き、パリを初めて訪ねた時点においてヴァレリーは、その事態に対応しきれず一種の精神的な麻痺状態に陥っていたのではないかという印象を受ける[62]。しかし、パリの町の刺激をひとたび知ってしまったヴァレリーは、パリ滞在を終えモンペリエに戻っても、モンペリエにそのまま静かに落ち着くこともできなくなるのである。1892 年 3 月になると、パリに残っている兄に「一緒にパリにいられないのが残念だ、火曜日をシャンゼリゼで過ごす兄さんがちょっとうらやましい。ここは燦燦たる太陽しかない[63]。」と書き送ることになる。モンペリエ大学を卒業し「ジェノヴァの危機」を通過したヴァレリーは 1892 年 11 月 26 日に母親と共に、教授資格試験準備のためパリにいる兄のもとへと出発する。12 月になると、モンペリエで復習教師の職についていた旧友フルマンへの手紙でパリでの文学的交際について触れ、「密やかに美しい仮面、あるいは翳りのある平板な多くの仮面たちが精妙な言葉をつぶやいて、ぼくを楽しませる。たとえばマラルメ、ホイッスラー、更にはエレディア家に集まる人々、アカデミーへの立候補者たちなど」と書き送りつつ、モンペリエの旧友への懐かしさを募らせている。ヴァレリーはモンペリエとパリとを心の中で交錯させながらも、次第にパリでの生活に手ごたえを覚えていき、翌年 2 月には、パリに居を定める決心を明らかにする。そして、ゲー・リュッサック街の、黒板とリジエ・リシェの骸骨の模造品以外何もないがらんとしたストイックな滞在型ホテルの

---

[61] 同書、435頁

[62] 例えばヴァレリーはジッドに当てた1891年11月7日付けの手紙で「パリはまるで汽車のように走り去ってしまった。モンペリエでのほうがずっとよく自分を見出すことができる、ここでは自分を取り戻すんです。」と書いている。(André Gide-Paul Valéry, *Correspondance 1890-1942*, p.135)

[63] Paul Valéry, *Oevres I*, p20（アガート・ルアール＝ヴァレリーによる年譜）

一室で生活を始めることになる。

この部屋は、1895年に発表されることになる「テスト氏との一夜」の中のテスト氏の住む部屋の描写に反映している。テスト氏の部屋は「任意の」という印象を与えた[64]、と書かれているが、それは地方から上京したヴァレリーの懐具合[65]のしからしむるところにより、あまたある部屋の中から偶々占めることになった部屋の、愛着やら趣味やらといったこととは無縁の、シンプルな機能だけをむき出しにした有様を下敷きにしているのではないかと思われる。この抽象性のイメージはパリ生活の始まりにおいて見逃せない。ヴァレリーが滞在したアンリ4世ホテルはゲー・リュサック街にあるが、これはソルボンヌ大学やリュクサンブール公園[66]も近いカルチエラタンの南端あたりに位置する。学生街の活気と利便性の高さが特徴であるが、この点へのヴァレリーの言及は見られない。むしろヴァレリーは、ナポレオン3世治下にセーヌ県知事オスマンによって推し進められたパリ改造計画によって実現した典型的な近代的グランブルヴァール（基幹道路）であるゲー・リュサック通りの醸し出す匿名的な権力の気配に強く反応しているように見受けられる。ヴァレリーの心の中では「大都市」と自分のいる「小さな部屋」という対象ばかりが生々しいのである[67]。

ヴァレリーは1900年には画家ベルト・モリゾの姪であるジャンニ・ゴビヤールと結婚し、ベルト・モリゾの所有であった凱旋門から歩いて5分ほどの閑静な住宅街であるヴィルジュスト街（現・ポール・ヴァレリー街）のアパルトマンの4階155平米を貰い受け住まうことになる。縁組は、マラルメの遺志をついで画家ドガが後押ししたもので、落ち着いて思索を続けていけるだけの生活基盤を求めていたヴァレリーにとって、物質的な面からしても、これはかなりの好条件であった。言ってみればこれは、ロウワーミドルクラスからアッパーミドルクラスへの上昇に等しい。ヴァレリーはこのヴィルジュスト街のアパルトマンから程近い、アッバス通信社に社長秘書として日参し収入を確保するとともに、黙々と『カイエ』の執筆を中心とする思索に身を捧げることになる。ヴァレリーは文学や芸術への志を持つ人々のみならず、経済界で活躍する人間

---

[64] Paul Valéry, *Oevres II*, p23

[65] この時点でヴァレリーは定職には就いておらず、父バルテルミー亡き後、母方のグラッシ家のささやかな遺産を取り崩す生活であった。

[66] パリ市内最大級の公園。例えばボードレールはリュクサンブール公園を文明の華ととらえている。

[67] ヴァレリーは当時を振り返って次のように書いている。「あの頃、私は、大都会のただ中、黒板一つ、ランプ一つ、そこらじゅうに衣類のちらばった恐ろしく狭い部屋の中で、能無しとなっていた。」*Cahiers I*, p.263

とも袖すり合わせて生きていたのである。そもそも、凱旋門近くの住宅街というのは、政府の高官や銀行家も多く住んでいる一帯であり、ボヘミアン気質の強い左岸の文化風土とは全く性質を異にしている。しかし、ヴァレリーはこの右岸の高級住宅地への違和感を口にすることはなかった。ヴァレリーは文学か否かを問わず、活動力あるものへの敏感な感受性と自然な敬意を備えていたように思われる。彼の交友範囲の中には実業の世界で名を成した人間も多く見られる。そうした人々との付き合いは、けっして彼の思考と矛盾するものではなかったのである。思うに毎日凱旋門を目の前にする生活というものは、国家権力の存在の重みと、歴史の原動力に常に思いを馳せないではいられないものだったのではないだろうか。単純に「反権力」といった言葉ではくくれないリアリスティックな政治的感覚が培われたとしても不思議ではない。

ヴァレリーは 1924 年には「パリの機能」[68]という批評文を、1937 年には「パリの存在」[69]という批評文を公表しているが、いずれの批評文においても、パリという都市のもつ力と可能性をきわめて総体的に捉えようとしているのが特徴的である。二つの批評文からそれぞれ一節を以下に引いてみよう。

> パリは何かある精神器官の増大を連想させる。そこでは純粋に精神的な可動性が支配している。一般化、分解、意識の回復、忘却などが、そこでは地球上のいかなる場所より速やかでかつ頻繁である[70]。

> 『パリ』はフランスの事実上の頭であり、そこにはこの国のもっとも顕著な知覚力と反応力とがあつめられている。その美と光によって、『パリ』はフランスに一つの顔を与え、その上には時としてこの国の全知性が輝く[71]。

若き日、パリという都会の脅威に激しい反応を見せたヴァレリーは、最終的にはパリという都市の持つ力と魅力とその謎を究極まで味わいつくしているように思われる。ヴァレリーは「パリを考えることは、精神そのものを考えることに匹敵し、それに交じり合っている」[72]とまで述べるに至るのである。一貫し

---

[68] Paul Valéry《Fonction de Paris》, in *Oeuvres II*, pp.1007-1010
[69] Paul Valéry,《Présence de Paris》, in *Oeuvres II*, pp.1011-1015
[70] *Ibid.*, p.1009
[71] *Ibid.*, p.1015
[72] *Ibid.*, p.1012

て精神の可能性の探求にかけていたヴァレリーにとって、パリという環境はいわば必然的に吸い寄せられる場所だったのであり、パリの街と意識・無意識を問わず化学反応を起こしているうちに彼の思考も形成されていったと言えるのではなかろうか。パリならではの社交界やアカデミー・フランセーズの存在も、ヴァレリーにとってはただ虚飾や権威主義として切り捨てられるべきものではなく、彼は社交界には社交界の（ことに社交界のご婦人方の）、アカデミー・フランセーズにはアカデミー・フランセーズの醸し出し、生み出す独自の価値があると考えており[73]、決してそうしたものにおもねることはないものの、その真価を見極めるのに率直であった。ヴァレリーの一連のパリ関連の記述を時系列に沿って読んでみると、彼は、異なる環境に入っていく際に脅威を感じるについても鋭敏であれば、環境の本質的な部分に感応する力も人一倍強かったのではないかという印象を抱かされる。

６．移動の日々―講演旅行者・文化使節としてのヴァレリー

ヴァレリーは、1917 年、詩集『若きパルク』の成功を以って文壇に熱烈に受け入れられたが、おりしも 1922 年アッバス通信社の社長ルベイの死去により、社長秘書としての穏やかで安定した生活を中断されたヴァレリーは、妻子を抱えた身でもあり大いに狼狽した。知的にも美的にもあくことなき洗練を求めるパリの社交界において、ひとたび才能を認めた者に対しては、支援することへのメセナ的な意識というのは目覚しい。「ヴァレリーを救え」の声がまたたく間に広まり、ヴァレリーの許には、執筆依頼、講演依頼が殺到することになる。

ヴァレリーは『カイエ』の執筆に没頭することを本来の仕事と考えており、依頼仕事に汲々とする毎日に悲鳴を上げてもいる。ヴァレリーはただ金のために、いやいやながら「仕事」をしたのだっただろうか。確かに「金」の必要は切実ではあっただろう。だが、原稿依頼や講演依頼がヴァレリーの潜在能力を開花させるきっかけとして働いたという面も見逃せない。また講演の要望に応え、フランス内外の土地を訪れる経験は、ヴァレリーに新しい認識をもたらすものであったのである。アッバス通信社秘書職失職の 2 年後、すなわち講演と原稿の依頼に追われることになっていた 1924 年、「…との一時間」シリーズ連載の第一回としてヴァレリーはヌヴェル・リテレール（*Nouvelle littéraire*）編集長のフレデリック・ルフェーヴルのインタビューに応え、自らの講演の経験

[73] *Ibid.*, pp.1119-1127 (《Fonction et Mystère de L'Académie》)

について次のように述べている。

ここ何年か、私はフランスの数々の隣国で講演をしています。それぞれの土地で、実に様々な、実に愉しい印象を抱かされます。国から国へ、すなわち私の場合で言うと、ある作家・芸術家集団から別の作家・芸術家集団へと、あたかも渡り鳥が道すがら、様々な気候の土地で、まったく違った、それぞれにおいしい穀物やら果物やらを味わうように旅していったり、それぞれの集団の知的な中心や詩的、哲学的な意図を一定量理解することほど興味深いことはありません。たとえばラシーヌやボードレールのようなフランスの大作家がベルギーやスイス、英国、イタリア、スペインでそれぞれ異なる評価を受けているのが目にされるわけです。これは非常に興味深い経験です[74]。

国境を越えると「公的」と呼びたいヒエラルキーはもはやほとんど存在していません。フランス語作品の名目的な価値や、伝統や既得の条件や大学のカリキュラムによってフランスで作られ維持されてきている、いわば信用に基づくタイプのフランス語作品の価値は、外国にあっては、相当力を入れなければ伝わりません。でも、本当に価値ある作品、すなわち普遍的なもの、少なくともヨーロッパにとって意義深いものは、熱烈な関心を持たれております[75]。

ヴァレリーはインタビューにおいて読者向けの顔をすることを心得ていると見え、『カイエ』の仕事から引き離されて不本意だなどという本音を漏らすことはない。しかし、上記のヴァレリーの言葉を単なる社交辞令とのみ受け取ることもできない。国によって、集団によって、ある作品の評価に違いがあること、国内での因習的なヒエラルキーによって支えられている作品は異国にあっては通用しないが、普遍的に関心を持たれる作品はあるという確信もまたヴァレリーは得ているようである。こうした経験は後に、ヴァレリーが 1936 年から亡くなる直前の 1945 年にかけてコレージュ・ド・フランスにおいて『詩学講義』を担当した際、文学史を参照したり著者名や作品名といった固有名使ったりすることをなるべく避け、「生産」と「消費」という抽象的な概念を根本に据え、文学

[74] Paul Valéry, *Très au-dessus d'une pensée secrète*, Entretiens avec Frédéric Lefèvre, Edisions de Fallois, 2006, p.85
[75] *Ibid.*, p.86

や芸術の問題を普遍の相の下に、機能的な言葉遣いで追求しようとした彼のスタンスに影響を与えているのではないかと考えられる。

講演旅行を重ねるヴァレリーにとって、発見は作品評価の相対性と普遍性の問題に限らない。ヴァレリーは、訪れる町の本質を、限られた時間・経験の中で感じ取るすべを見出しているのである。招かれた講演者が口火を切る際には、かならず招待者への感謝と、所謂「ご当地トーク」を交えるのがエチケットである。こうした社交のプロトコルをヴァレリーは決して踏み外さなかった。数々の講演録を読むかぎりでは、むしろ優雅に演じていると見受けられる。こうしたプロトコルを行うには、ある土地の精髄を捉えることが必要になる。それも、観光の謳い文句のような常套句を一歩抜け出した魅力にも欠けない何かが、「文化のコメディアン」[76]になっていた彼には期待されていたはずである。おそらく、こうした必要にかられてのことであろう、ヴァレリーは「町認識の法則」というものを意識するにいたるのである。ヴァレリーは1939年スイスでの万博に「チューリッヒ好き」と題したエッセーを寄せ、次のように書いている。

> 町も思念の中では一種の人物です。誰かあるひとのようにわれわれをいざなう町もあります。別の誰かのようにわれわれの気分を悪くする町もあります。またときとしては、かなり時間をかけたてほどきと引き換えに、徐々に、やっとわれわれを捕らえる町もあります。ひとつの町は、それが私どもに親しいものになるにつれて、段々と興味のある、発見に富む町と見えてくればくるほど、一層愛されるものです。ところで町の柄は、景観と、過去と、現在と、なんとも知れぬ未来のしるしで組み立てられています。過去は石や慣例の中にあきらかに認められるものですし、現在は通りや公共の場所に活気を添えていますし、未来のしるしは通行人の目の中、商店の陳列窓の梯子―特に本屋のそれのうち、建ちつつある建築のうち…ほぼ至るところに読み取れます。
>
> こうした「町認識の法則」は、私のチューリッヒ経験に甚だ正確にあてはまります[77]。

このような「町認識の法則」は、言ってみれば文明や文化のあり方の、素朴で具体的な観察方法を導きだすものなのである。頻繁な移動を強いられ、人の相貌を捉えるかのごとく出先の町の相貌を捉えようと試みる生活の中で、ヴァ

---

[76] 松田浩則「文化のコメディアン」『一橋論叢』第117巻第3号，1997年，p.474による。
[77] Paul Valéry, *Vues*, La Table Ronde, 1948, p.271

レリーは知らず知らずのうちに歴史的、文化的、社会的な観察眼を磨いていったのではなかろうか。アッバス通信社での秘書職失職ののち、講演生活に入ってからは、講演や依頼原稿の内容のみならず、彼の個人的な省察の記録である『カイエ』においても歴史や政治をめぐる記述が目に見えて増えてくるのは、こうした経験が大きく与っていると考えられる。また、各地で講演を重ね、各地の知識人・要人との交流を重ねる経験を経たからこそヴァレリーは、国際連盟の知的協力者会議の議長、ニースの地中海研究所所長、ペンクラブ会長といった公職を引き受け任務を全うすることができたのではなかろうか。ヴァレリーのこうした社会的な活動の意義と限界については、まだ充分に議論されているとはいえない状況にあるが、パリのフランス国立図書館草稿部に所蔵されている数々の未刊資料[78]から、ヴァレリーの活動の詳細をかなりたどることができる。しかし、こうした未刊資料の分析については稿を改めなければならない。

ヴァレリーはまずフランスの文壇の寵児となった後、ヨーロッパ各地へいわば文化使節として講演を重ねる身となり、次第にヨーロッパの代表的な知性と見なされるにいたったわけであるが、ヴァレリーにはヨーロッパ外部訪問の機会も訪れた。1936 年 4 月のアルジェおよびチュニスでの講演旅行である。ヴァレリーにとってこれは 11 年前の兵役での巡行の後、2 度目のアフリカ訪問である。講演の題目は「地中海の印象」であった[79]。ヴァレリーにとってアルジェリアの印象は強烈なものであった。「手控え片々」と題したアルジェリア訪問をめぐるエッセーは、短いながらヨーロッパの外部に触れる機微が瑞々しく描かれ、外部に触れた経験からヨーロッパのアイデンティティについての省察に導かれるヴァレリーの鋭敏な思考が脈打っている実に鮮烈な一編である。

まず、ヴァレリーによる風景描写を見てみよう。セートの海辺で、人間的なものと非人間的なものとを一度に前にしていた、あの無私なる「眼」の存在を喚起する記述である。

私はアルジェとチュニスのあいだのどこかにあるサンードナという名の土地で目をさます。私は自分が見たこともなかったものを、素直な目で見る。と

---

[78] ことに分類番号NAF19126 Dossier I, Le Centre Universitaire Méditérranéen de Nice (folio128-298)およびNAF19127のDossier II, Société des Nation: Préparation des travaux de l'Institut international de coopération intellectuellle, Vers un nouvel humanisme et le Destin prochain des lettres (folio1-129)

[79] Paul Valéry, *Oeuvres I*, p.61 アガート・ルアール＝ヴァレリー作成の年譜による。

ころどころにやわやわした陰を落とす、穏やかで滑らかな丘が持ち上がっている果てしない平原。その傾斜はこまかい灰の流れを思わせ、それからいくつか岩の頭が突き出ている。

この単純な広がりが人影に活気づくことはめったにない。けれどもそれらのいくつかの人影はつりあいの点で私をどきっとさせる。私はよそでは人間の大きさと、これに対する地面と広々した空の広大な展開とのあいだの、これほどはっきり感ぜられる、しかも快い関係を観察したことはない[80]。

見知らぬ土地に出会うときの曇りない眼が感じられる文章である。空や大地を背景に人間の姿が時折うかびあがる、という描写であるとすれば凡庸である。しかし、空や大地という背景と人間との対比の鮮烈さに打たれ、そのつりあいproportionを美的なものとして受け止める感覚に非凡さが感じられる。こうして人間的なものと非人間的なもの、最も根底的なコントラストを描いた後、ヴァレリーは、アルジェリア人の風俗に眼を向けていく。

ここでは農夫は騎乗者らしい。そう見える。そらそこにひとり、おかみさんを尻に乗せた農夫が見える。驢馬が馬か、乗り料はふたりの軽い外套に半ば覆われ、ふたりの相乗りのせいでへこたれている。付け足すまでもなかろうが、アラビア人の妻女の肩掛けは青で、その色調は私をうっとりさせる。また、たっぷり布にくるまれて風景の中に孤立する一本の樹の根方に坐りこむ哀れなやつには、風格がある。それは本当だ。しかし私の純粋な喜びは、それに考えを向けるが早いか、読書や美術館の思い出の中で、息絶える。それればかりではない。喜びは、今しがた私の気に入っていたものが、私の内部の、ペンの奴隷を刺激すると感ずると、悲哀の気分に変わる。官能の喜びが訪れるが早いか何かの芸術の問題に変形しなければならぬとは、何といやなことだろう。

けれども私は跳ね上がったおかげで目があく。そして私の反抗の動きが急に私の精神に光明を与える。私は理解する、―というか理解したつもりになる―いわゆる「土着の民」の高貴さが、通念によってのみ価値を持つすべてのものに対してかれらの抱く讃嘆すべき無関心さを土台として成り立つものだということを[81]。

---

[80] Paul Valéry, *Vues*, p.255
[81] *Ibid.*, pp.255-256

この記述の最初のパラグラフには、アルジェの風俗に官能的な喜びを見出しつつも、目の前の光景をいわばオリエンタリスムとして享受することの居心地の悪さに気づいてしまうヴァレリーの繊細さが現れている。つまり、アルジェの風俗をまったく美的なものとして享受・消費してしまう態度の中にある権力構造をヴァレリーは正視できないのである。「けれども」、とパラグラフの切れ目でヴァレリーは立ち止まり、自らに問い直している。本当にヨーロッパ人たる私は高みに立って彼らを見ているのか、との疑問が生じたのである。すなわち、高みに立っている（権力者の立場にある）と考えるのは、むしろ傲慢というものではないか、という疑問である。そしてヴァレリーはアルジェの地の人々の存在感に直感的に感じ取られた「高貴さ」の印象の由来を問い訪ねる。そして、その「高貴さ」が「通念によってのみ価値を持つすべてのものに対してかれらの抱く讃嘆すべき無関心さを土台として成り立」っていることに思い至るのである。ここで「通念」と名指されているものは、実際にはヨーロッパ人の「通念」なのだ。アルジェの人々を目の前にすることによって、ヴァレリーはヨーロッパ人として自ら無意識に前提にしてきたことが、全く通用しない世界があることを悟っているのである。そしてヨーロッパにあって、アルジェに無いものに気づくに及んで、ヴァレリーはヨーロッパの無意識の前提を矢継ぎ早に言語化するに至る。以下の文章を見てみよう。

> 哀れなヨーロッパ人はいつも目の前に何かなすべきことを見る。企画と危惧がかれを攻め立てる。かれは明日のその先の日に生きているのだ。閑暇はかれには極悪の罪であり、かれはこれに怠惰という名をつける。魂の自由はかれには重荷だ。企図の魔がかれを苦しめる。かれは時を金に換え、金を速度に変え、速度を麻酔剤に変え、放心に、つまり自己の不在に変える。
>
> そしてわれわれというこの奇態な人種にあっては、詩人芸術家に至るまで、誰彼なしに、行動し、「生産」しようという激情、ひとつひとつの大きな快楽、印象、生の香水の一滴を活用して、それらが含んでいる絵画、文字、あるいは「虚栄の市」の取引のたねになる全く別種の価値を絞りだそうという激情にとらわれるのだ…[82]。

このように自身の思考の曲折をたどるこのヴァレリーのエッセーは、アルジェ

[82] *Ibid.*, pp.256-257

リアを遅れたものと見なす視線は希薄であって、驚くほど文化相対主義的である。ヨーロッパを進んだもの、上位にあるものと見なしているのではなく、ヨーロッパの文化もアルジェの文化も、それぞれひとつの型としてみる視点が貫かれているのである。ヴァレリーによるアルジェの記述から陰画のように浮かび上がるヨーロッパ文化は、決して威厳を失うことはないが、悲劇的な影も背負ったものとしてあるように思われる。こうしてヴァレリーはヨーロッパの活力の原動力であるものとそれがもたらす悲劇の両面に、鋭い眼差しを向けていると言えるであろう。

アルジェリア訪問にまつわる著作としては、この公表されたエッセーのほかに、アルジェリアのムスタファ滞在中の4月23日に書き始められたという政治論『純粋アナーキー応用原理[83]』がある。思考のひらめきに満ちた短い断章で構成された、政治の原理をめぐる覚書である。内容自体にアルジェリア個別の問題に関連するものは見当たらない。ただ冒頭に本書執筆の由来として「アルジェの空の下にわが身をさらし、犬が一匹うらめしそうに泣き、しなやかな棕櫚が一面に生い茂り、梢まで真っ黒な松がおおいかぶさる庭で子供たちが笑い興じているとき、突如として精神に閃きいたりしものなり。」という言葉が書き込まれている。このような風景描写的な記述は、本書にあってこの冒頭に限られているだけに、鮮烈な印象を残す。無論、上記の政治論をヴァレリーが書いたのは、彼の生きた時代の危機、ことにフランスおよびヨーロッパのそれが背景にあってのことであったとはいえ、政治論（それも高度に原理的なメタ政治論とも言うべきもの）を書こうとの意図が、ヨーロッパの外部に身をさらす経験とともに閃いたというのは興味深い事実である。凱旋門と指呼の距離にあるヴィルジュスト街の書斎で、ヴァレリーはこのような書物を構想し得たのであろうか、と問いを立ててみることもできよう。

ヴァレリーは短い断章からなる政治論を1938年9月まで書き溜めた後、1944年の冬に息子のフランソワ（後にOECD本部フランス代表部付大使を務めることになる）に、「たぶんこれを遣って何かを書くことはもうないだろう」と言い、それでも「お前にとっては面白いことがあるかもしれん」と言い添えてこのノートを託したという。この著作については稿を改めなくてはならないが、旅先、しかもヨーロッパ外部という場所の経験が、本書の執筆にあたって強烈な触媒として働いたのは否定し得ない事実である。

---

[83] *Les principes d'an'archie pure et appliquée,* Gallimard, 1984

講演者として旅するヴァレリーには、以上に述べてきたとおり、文明の根本について思いを致さざるを得ない機会が幾度も訪れた。ヴィルジュスト街の書斎での毎朝の『カイエ』の仕事を自分本来の仕事と考えたかったヴァレリーであるが[84]、しかし、この歴史のめぐりあわせに与えられた機会が、ヴァレリーの著作に広がりと深みを与えたのは疑い得ない。

結び

以上、ヴァレリーの履歴に沿いつつ、彼がかかわりを持った土地とその場所の経験の意味について素描を試みてきた。ここから、「ヨーロッパの知性」としてのヴァレリーの存在がいかなる曲折を経て形作られてきたか、その概略が浮かび上がってくるのではないだろうか。おそらく、今までに挙げてきたどの土地を欠いても、どの経験を欠いても、ヴァレリーの存在は違ったものとして歴史に刻まれていたことだろう。

ヴァレリーの生涯における場所の経験をあえて総括するとすれば、次のようになる。

故郷セートの風光がヴァレリーの最も根源的な感受性を培い、モンペリエの中都市の落ち着きが芸術の探求を介して内面の島を培った。ジェノヴァは生の厚みと広がりを教え、ロンドンは経済活動の中にある精神的な真髄の存在を教え、パリは大都市としてヴァレリーを当初圧倒しながらも「精神そのものを考える」最良の環境を与え、講演で訪ねた各都市は、ナショナルな価値を越えたヨーロッパ的価値のありようを再吟味するようヴァレリーを仕向けた。

旅行作家であるより書斎の人たろうとしたヴァレリーだが、彼は結局、それぞれの風光に、それぞれの都市に、それぞれの場所に、異様なほどに、まさしく敏感な計器のごとく反応していたことが残された数々の断片から読み取れる。場所の経験に由来するヴァレリーの文章には、時に意図された旅行記以上に深い場所の刻印が認められるのである。

---

[84] たとえば、アルジェリアを鮮やかに描いたエッセー「手控え片々」の冒頭は、自らの本質は旅行作家としてのそれではないと弁明する次のような文章で始まっている。「私は元来あまり上等な文学的旅行者ではない。私は自分の目に入るものしか見ない。あまりすみやかに過ぎ行くものは私を倦怠させる。でなければ私をまったく無感覚のままに放っておく。長続きするものが私に有無を言わずのしかかり、部屋でタバコをふかし、目をぼんやり遊ばせているとき、私が私の精神をたねに作りだすものを私に考えさせ、すぐそういうものへと、私を連れ返してしまうのだ。自己に沈潜するのに、旅行が何になろう。」（*Vues*, p.255）もしかしたら、このような弁明は、あくまで内省の人間でありたいと願いつつも、鮮やかすぎるアルジェリアの描写を成しえてしまう自分への恥じらいであり、韜晦であるのかも知れない。